

一般戦解説

①井上賢一作

13角成、同玉、14金、同玉、15香まで5手。

26の香筋を生かして攻めたい初形。初手24金は筋が悪く、22玉で捕まらない。そのため、22に逃がさないように攻めるのが1つ目のポイント。初手24香は13玉、初手35金は24歩合、同香、13玉で詰まない。初形では13に角が利いているが、攻方駒によって塞がれると利きが消えるというのが2つ目のポイント。後に利きがなくなる駒を先に捨てておくという手筋があり、本作では13への利きが消えそうなので初手は13角成と指す。同香なら24香で早く詰むため2手目は同玉だが、14金と捨てて香筋を通し、同玉に15香で詰め上がる。有力そうな手を試してみても、その受け方から対策を練るのが解図のコツである。

②野々村禎彦作

59香、58と、54龍、66玉、57龍、同と、44角まで7手。

両王手がちらつくが、初手54龍は66玉、44角、55歩合で逃れ。初手64龍とすれば66玉には75龍で詰むが、これには2手目45歩合、55龍、47玉、45龍、58玉で逃れ。このとき58に利きがあれば詰むので、初手59香と据えてみる。通常の合駒は前述のように詰むし、57銀合と46に利かしても45龍、66玉、44角で詰み。そこで玉方は58とと移動合で応じ、67への逃げ道を作る。これにより64龍には45歩合、55龍、67玉で逃れるようになっていて、攻方は合駒されないように54龍と両王手するよりない。以下は収束で、龍を捨ててと金を引き戻す手順は味が良い。本作はさまざまな合駒が絡んで難解だが、7手詰で中合を動かすのは頻出する表現なので頭に入れておきたい。

③佐々木浩二作

43銀成、同銀、35金、同と、33銀不成、34玉、36龍まで7手。

初形で45への利きは勝っているが、短編詰将棋で駒交換は考えなくてよい。具体的には、45で清算すると53玉の逃げ道が生じて詰まない。他の候補手である43銀成、35金、33銀不成はいずれも作意に登場する。すなわち、その順番を考える問題なのだ。35金を同とと取られると馬筋が通り、33銀不成を同銀と取られると香筋が通ることから、残る43銀成を初手で指すことになる。2手目同玉は98角、54歩合、同龍、32玉、34龍で駒余りなので2手目は同銀。3手目は2択だが、24銀の利きが残っていないと35金を同玉と取られてしまうことから、35金、同と、33銀不成が正しい手順となる。34玉で一見守りが固いようだが、36龍とすると35とが動けなくなり、どの合駒も同角で詰むので無駄合となる。このように守備駒が線駒(龍など)に挟まれて動けない詰み形をピンメイトという。

④妻木貴雄作

22飛、24桂合、26金、14玉、17飛、16桂打、同飛、同桂、15金、同玉、27桂、14玉、26桂まで13手。

簡素な図で考えやすい。盤面上側が広いので初手は飛を上段に打って押さえるが、近すぎても遠すぎてもいけない。初手23飛は14玉、初手21飛は34玉、26桂、33玉で、いずれもギリギリ捕まらない。初手22飛が好点で、14玉には44飛、15玉、24飛成まで、34玉には26桂、35玉、32飛成、25玉、34龍、15玉、14龍まで、いずれも作意より早く詰む。初手22飛に35玉も26金、34玉、32飛成、33歩合、43飛成、24玉、33龍引、14玉、23龍で作意よりも早い。そこで合駒を考えるが、合駒を特定するには利きのない合駒を24に打ったと仮定して進めるとよい。24合に利きがないければ、3手目から26金、14玉、17飛で詰むが、このときに延命可能な合駒は1筋に利きを持つ駒である。24に金・銀・角を打ったことにして進めると、17飛以下15合、同金、同(金・銀・角)、同飛、同玉、26龍、14玉の局面で取った合駒を打って1手詰なので2回目の合駒が持駒に余る。そこで、1回目も2回目も使いにくい桂を合駒する。すなわち、24桂合+16桂打の複合合駒が正解となり、以下は金を捨ててぴったり詰め上がる。合駒を特定するには局面を先に進めてみるのが重要である。

⑤山路大輔作

12飛、同香、33歩、21玉、11飛、22玉、23歩、11玉、32歩成、44香、22歩成、同角、23桂不成まで13手。

25との配置から初手34飛が筋だが、21玉と逃げられるとどうも届かない。33歩や33飛も21玉が固く詰まない。21玉を防ぐ手段はほとんどないため、21玉に対して新たな攻め筋を用意することを考える。その手段が初手12飛の捨駒で、香を移動させることで11飛の王手が可能となる。1筋に飛を2枚使うために3手目は節約して33歩、これに対し42玉は43飛、51玉、52歩、同玉、53飛成、61玉、62龍で早く詰むので2手目はやはり21玉が最善となる。11飛に対し同玉は32歩成、44香、23桂不成で早く詰むためいったん22玉とよろける。ここで打つ23歩が後に邪魔駒となり、成り捨てる手が入るのはうまい。本作のように、詰上りで攻方の駒が2枚しかないものを清涼詰という。12飛は見えにくい捨駒だが、実戦形詰将棋でたまに出現する手なので頭に入れておきたい。

⑥青木裕一作

69馬、58角合、同香、43玉、61角、52桂合、同角成(不成)、同歩、55桂、53玉、63桂成、43玉、53香成、同歩(同銀)、25馬まで15手。

初手は開き王手しかないが、馬をどこに動かすのが良いだろうか。2手目43玉にも63玉にも馬の王手で1手詰になるように注意すると、馬の移動先は36、47、76、67、49、69に絞られる。いずれも2手目が玉移動なら詰むが、香と馬の交点に合駒されると容易ではない。例えば36馬には54香合、同香、63玉となり、以下53香成、同玉、55香には54香合のように千日手で逃れられてしまう。これは76馬も同様。次に47馬は、56香合、同香、63玉、53香成と進み、これに同玉なら香を短く打って詰むが、53同銀とされると62へ逃げ道が生じてしまう。63玉には馬で直接王手できるようにする必要があるため、初手は馬を左へ動かす必要がありそうだ。ここまでの議論から、馬の移動先は67か69に絞られた。67と69の差は、桂合の有無である。初手67馬は56桂合、同香、43玉、53香成、同玉で桂の打ち場がない。一方初手69馬は、馬と香の交点で8段目になるため桂合がないのである。本作はそれでは終わらない。今度は角合を使って延命する。58角合、同香、43玉と進めると、角の打ち場は61しかない。61角には今度は52桂合が可能で、同角成、同歩と進むと先ほどの失敗例と同じようだが、52が塞がっていることにより新たな詰み筋が生まれる。それが55桂～63桂成で、以下は香を捨てて収束。理詰めで解ける作品だが、考えることが多く難しいと思う。本作が解ければチャンピオン戦でも良い結果が残せるだろう。